

CONTENTS

- 2-3 シリーズ この人に聞く 第16回
石田裕之さん
「子どもたちの夢の選択肢を広げたい」
- 4 第26回 ワン・ワールド・フェスティバル体験記
- 5 活動紹介 資料館見学3
長崎原爆資料館
- 6 活動フォトニュース
- 7 活動日誌 (2月～4月)



教育の光に輝く瞳

けなげに精一杯のおめかしをして「開校式」に参列したバングラデシュの女の子。貧しい村に、待望の新校舎ができたのです。支援したのは日本のNPOのみなさん。シンガーソングライターの石田裕之さんも、スタッフのひとりです。(2-3面に石田さんのインタビュー) 撮影：平田篤州



シンガーソングライター
NPO法人「Bangladeshの村を良くする会 (P.U.S)」理事

いしだ ひろゆき
石田 裕之さん

1980年12月21日、神戸市生まれ。38歳。神戸大学法学部卒。2003年、プロのシンガーソングライターに。神戸学院大学「地域学」非常勤講師、篠山市観光大使、防災士。テレビ、ラジオでも幅広く活躍中。2017年、日本のアカペラ・ボイスパーカッションの第一人者KAZZと共に、防災・減災をテーマに新たな音楽ユニットBloom Worksを結成。精力的に活動している。

子どもたちの 夢の選択肢を広げたい

今年2月下旬、Bangladeshの小さな村。シンガーソングライターの石田裕之さんが、子どもたちに囲まれて歌った。日本の国際ボランティア組織とNPO法人「Bangladeshの村を良くする会 (P.U.S)」の連携による教育支援で誕生した、貧しい村の新校舎。P.U.Sの理事も務める石田さんは、その「開校式」に理事兼シンガーソングライターの二役で出席した。石田さんに、聞いた。

初ギャラは幼稚園でのライブ

— 38歳の若さで理事として活躍されています。P.U.Sの活動はいつからですか。

P.U.Sは、兵庫県篠山市を拠点にBangladeshで活動している岩下八司さんと啓子さんご夫妻が、1981年に立ち上げました。2007年ごろだったでしょうか。篠山市でライブをしたときに、同じ会場で岩下さんがBangladeshの写真展をされていました。そんな御縁から岩下さんに「Bangladeshにいっしょに来てくれへんか」と言われ、P.U.Sの活動に興味を持ち始めました。

— それからP.U.Sの活動が始まった。

はい。コンサートの入場料の一部を役立てて、Bangladeshの村の3人の子どもの教育里親になりました。でも、岩下さんと本当に懇意になったのは、2011年3月に起きた東日本大震災の被災地でのボランティア活動を通じてでした。行った先に、岩下さんがいた。岩下さんは、災害があったら一目散に現地に駆け付ける人です。「行政」の先遣隊の役割を担う…そんな構図です。

— 2011年5月、宮城県女川町のことですね。

女川町では街の8割が津波で流されたので、ボランティアは泊るところがなく、みな日帰り。そこに、岩下さんがテント村をつくり始めた。私は、岩下さんとは関係なく、篠山市社会福祉協議会のボランティアバスで、いわゆる「泥かき作業」に行き、岩下さんの活動を目の当たりにしたのです。そのときは、自分たちの非常食をテント村に置いて帰りました。そんなことから交流が深まり、2012年1月に、インドとの国境に近い、密林の広がるBangladeshのパラトール村に1週間ほど滞在。2018年春に、理事を引き受けました。

— ユニセフの活動はどう見えていますか

1995年1月17日、中学2年の3学期に阪神淡路大震災が起きました。そのとき、生徒会長だったのですが、何かしようと思いついて、神戸で生徒会のみならず街頭募金をしました。すると、100万円も集まって。「あんたら、よう頑張ってるなあ。おっちゃんも頑張らな」と言われたりして……。ユニセフの募金活動と通じる、そんな体験がありました。

— 石田さんの活動は、子どもたちへの想いがとりわけ強く見えます。

そうですね。そこもユニセフと通じるところでしょうか。音楽一本で生きよう決めて大学を卒業したのですが、仕事がありません。来る日も来る日も「ライブをさせていただきませんか」とショッピングモールなどに飛び込み営業をかけました。そして、初めてギャラをいただいたのが、幼稚園でのライブ。園児のお母さんが路上ライブを聴いてくださっていて、幼稚園につないでいただきました。ドラえもんとか、子どもたちに人気のある歌をたくさん歌いました。私の「社会派」を自認する活動の原点は、そこにあったのかもしれない。

「良さを伸ばす」支援のあり方

— Bangladeshの村の人々には、どんな思いで接していますか。

ともすれば、Bangladeshの村を日本人が一方向的に支援している、と見がちですが、それは絶対に違うな、と思っています。確かに貧しい、経済的に困っている。でも、彼らは彼らなりの幸せを見出している。少数民族の共同体ですが、助けられたり助けたりと絆がしっかりしています。子どもたちも、家族の一員として、村の一員として補い合っている。子どもたちの瞳は、輝いています。勉強への意欲もある。むしろ、私たちのほうが学ぶことが多いですね。

——古き良き日本の原風景のようなお話ですね。さて、子どもたちの夢は。

ベンガル語が主流ですが、英語を話せる子もいます。みんな大学に進学して首都ダッカに出て就職したいと思っています。村にもスマホが普及していて、SNSなどの大量の情報が、都会への憧れを高めています。「早くダッカに行きたい」という思いを強めています。スマホ、そして何にもまして新校舎の建設などの「教育支援」が、子どもたちの夢の選択肢の幅を広げています。

——石田さんは、日本社会の現状にも目を向けています。

私の世代は、スマホが普及する「以前」と「以後」の暮らしを比較できます。「スマホ以前」より「スマホ以後」の日本の社会は、息苦しくなっている。だから、バーチャル的なスマホの世界に逃げ込みたくなる。現実の社会が、もっと魅力的にならなければなりません。

——日本の子どもたちも、危ういですか。

日本の子どもたちは、なんでも「そろってしまっている」ところからのスタートです。生きるコースが、生まれる前から見えている。一方で、「子どもの貧困」が問題になっている。バングラデシュに行くたびに、「導いてあげる子どもたち」ではまったくなくなりました。今後、いろいろな開発の手が入ることによって、日本のようになってしまったらと心配さえます。日本の価値観が、バングラデシュの良さをスポイルしてしまうのではないかと……。

ですから、日本と同じ轍^{てつ}を踏むのではなく、バングラデシュの良さを損なわずに「伸ばす形」で支援の方法を考えなければなりません。

——学校建設などの教育支援はその一つだ、ということですね。

そうです。教育は「生きる力」を培います。その一点で、P.U.Sの活動も続けています。バングラデシュの農村部に、学校が圧倒的に足りないことは事実です。今後も、学校建設は続けていかなければなりません。そして、音楽にも、子どもたちの夢を広げ、未来を拓く力があると思っています。

(聞き手 平田篤州)

P.U.S (ポリ・ウンノヨン・ションスタ=村を良くする会)

岩下八司さん、啓子さん夫妻が1989年12月1日、ボランティア組織「P.U.S」を設立。教育里親制度をつくって子どもたちに奨学金を送ったり、新しい学校を建設したり、教育支援を中心に活動して、これまでに11校の学校が開校し、のべ5,000人以上が通っている。2011年に篠山市にフェアトレードショップ「だいいょうぶ屋」をオープン、2013年にNPO法人となった。石田さんは理事として、主に広報を担当している。



石田さんのリードで合唱する現地の子どもたち。「幸せなら手をたたこう」を日本語で歌うシーンもありました(2019年2月24日、バングラデシュ・西ジャムサ) 撮影：平田篤州